

『落窪物語』論

——「書かず」型草子地の視点から——

大 原 智 美

はじめに

『落窪物語』を読み進めると、しばしば「くはしくは書かず」という類の地の文に出会う。「書かず」というように、作者が書くことを否定するこの記述は、内容が書かれることで初めてストーリーが展開していく物語文学にとっては一見、不必要かと思われる。しかし、必要かと思われるその記述があるからこそ、逆にその部分が際立っている。この「書かず」型表現については神田龍身氏が「書かず」とあることで、自らが書くことにより、成立したテクストであることを逆説的に認めてしまっている」と述べている⁽¹⁾。

また、この「書かず」という類の記述は注釈書などにおいて「草子地」として注を施される場合が少なくない。「草子地」という語については、『日本国語大辞典』に「物語などの中で説明のために作者の意見がなまのままで述べられている部分⁽²⁾」とあり、『平安朝文学事典』には「物語の中で、作者が読者に直接語りかけたり、内容に関して注解や弁解を加えたりするような叙述を、一般の地の文と区別するときの名称である。これに気付かずに読みすすめようとすると、筋の混乱を生じることが多い。」と説明がある。先行研究

としては、井爪康之氏、中野幸一氏、藤井貞和氏、三谷邦明氏の草子地研究があるが、やはり「草子地」という語の内容は必ずしも明確だとは言い難い。

しかし、そこに「草子地」が「物語の作者が主観を示すことで、直接的に読者に相対することのできる地の文」という共通認識を見出だすことは可能である。よって、この「書かず」という類の記述も、そこに「私は書くことをしない」という主観が示されているため、草子地の一つとして認定し、論を進めようと思う。本論では『落窪物語』における、この「書かず」型草子地を追究することで、それらの性格や傾向、さらに「書かず」型草子地を使うことによる意味や効用を考察することを目的とする。また、「書かず」型草子地を根拠に、『落窪物語』の前後作品である『うつは物語』や『源氏物語』との関連性も考えてみたい。

一章 『落窪物語』における「書かず」型草子地

(一) 『落窪物語』における「書かず」型草子地（全十二例）

ここでは、研究対象となる「書かず」という形式の地の文を『落窪物語』の本文から抽出し、通し番号を1～12とした。その際に引

用する本文は、室城秀之訳注『新版 落窪物語 上 現代語訳付き』
（一・二巻）、『新版 落窪物語 下 現代語訳付き』（三・四巻）（角
川学芸出版、平成一六年二月）に拠る。

1 御産養、我も我もとしたまへれど、くはしくは書かず、思ひや
るべし。ただ白銀をのみよろづにしたりける。遊びののしる。
（巻二 一二九頁）

2 衛門督、おぼえのまさり、わが身の時になりたまふまに、中
納言殿に、吹く風につけて侮り、懲じたまふこと多かれど、同
じことのやうなれば書かず。（巻二 一二二頁）

3 「あやしう昔心地して」「あはれなる御声どもかな」とて、言ひ
ゐたることもは書かじ。うるさし。かたみに、うれしきよし
をぞ言ひける（巻三 一八頁）

4 こたみ、わが御殿に皆引き率て、迎へたてまつりたまひてなむ。
くはしくは、うるさければ書かず。例の、人のたいたいといかめ
しう猛なりけるなり。（巻三 七七頁）

5 屏風の絵、ことどもいと多かれど、書かず。（巻三 七七頁）
人々に禄賜ふことも同じやうにて、猛なることどもなれば、書
かず。（巻三 八六頁）

7 司召に、左の大臣殿、太政大臣に、大将、左の大臣になりたま
ひぬ。つぎつぎの御弟もなりあがりたまへれど、一所の御上を
書き出だす、あいなければ、書かず。（巻四 一〇三頁）

8 御子生み、袴着たまふことどもは、暇なくて書かず。（巻四
一〇八頁）

9 手あたり気配などのをかしげなれば、うれしと思ひけり。聞こ

えたまひけむことは、聞かねば書かず。（巻四 一二〇頁）

10 車の多からむは、所せしとて、三つばかりしてなむ、帥、わた
しける。北の方、対面してきこえたまへることども書かず。思
ひやるべし。（巻四 一三七頁）

11 衣箱一具あり。この女におこせたまへるなるべし。片つ方には、
御装束一具、片つ方には、黄金の箱に白粉入れてすゑ、小さき
御櫛の箱入れたり。くはしくは書くべけれど、むつかし。（巻
四 一三九頁）

12 帥は、播磨守待ち受けて、いみじういたはりけることは書かず。
（巻四 一四六頁）

これらの用例のうち、どの用例がどの注釈書に草子地として指摘
されているのか表に示した。その際に、注釈書には本文の引用とし
ても使用した『新版 落窪物語 上 現代語訳付き』（一・二巻）、
『新版 落窪物語 下 現代語訳付き』（三・四巻）（角川学芸出版、
平成一六年二月）（以下、『角川ソフィア文庫』と呼ぶ）のほか、『新
編日本古典文学全集一七 落窪物語 堤中納言物語』（小学館、平
成一二年九月。以下、『新編日本古典文学全集』と呼ぶ）、『新日本
古典文学大系一八 落窪物語 住吉物語』（岩波書店、平成元年五
月。以下、『新日本古典文学大系』と呼ぶ）の三本を利用した。なお、
『新日本古典文学大系』ではこれらをいずれも「草子地」ではなく、
「書き手の断わり」という注記で指摘していた。

『新日本古典文学全集』は、ほぼ全ての「書かず」を草子地とし
て認めているが、残りの二つの注記はまちまちである。数量として
は、巻一に〇回、巻二に二回、巻三に三回、巻四に七回、というよ

角川ソフィア文庫	1・2・3・4・5・6・10・11・12
新編日本古典文学全集	1・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12
新日本古典文学大系	3・4・5・6・7・8・12

うに、「書かず」の記述が巻四に偏っているということが分る。このことから、虐待・報復・報恩という順に物語が展開する『落窪物語』において、作者は主に報恩部分に「書かず」の記述を多く残したということが分かる。実際、虐待場面に「書かず」の記述は一度もなく、報復場面に一例、そして七十の賀や法華八講などの報恩の場面には四例の「書かず」の記述が認められる。残りの「書かず」は落窪姫君と道頼夫妻の若君の成長、あるいは侍女達の会話の場面などに確認できる。

(二) 理由付きの「書かず」型草子地

特徴として、全十二例のうち、八例(具体的には、2・3・4・6・7・8・9・11)が、「書かず」に対して何らかの理由を付け加える形態をとっていることが挙げられる。この、「書かず」の記述に理由が付いているものがあるということについて、中野幸一氏は研究対象を『源氏物語』にした論文の中で、「理由付けは勿論作者の虚構であるが、それだけに様々な理由が考え出され、この種の草子地を一層多様化している。便宜上省略理由の内容によって細分してみると、『未見聞』・『煩雑』・『些細』・『同列』・『献辞』・『表現不能』などに分けられる」と述べている⁵⁾。

そこで、中野氏による理由の分類を『落窪物語』の八例にも適用

できるか検討した。その結果、先ほどの八例全てが分類できることが分かった。まず、2であるが、これは「書かず」の前に「同じことのようなれば」とあるので『同列』に分類できよう。四の君と面白駒の結婚詐欺事件、清水寺での車争い事件などを始めとした報復も積み重なり、既にいくつかを書き記してきたので、もう何度もう書くことはしまい、という作者の姿勢の表れであろうか。中野氏はこの表現方法について、「実際に既述されたことでなくても、物語によく出る場面とか、行事・風俗などに関する定まったしきたり、あるいは読者が常識的に推察しうるような事柄、同様な趣向の叙述などについても、重複の煩雑をさけるために、しばしば用いられる。」と述べている⁶⁾。

次に4・6・7・8であるが、これらは「書かず」の前に「うるさければ」、「猛なることとなれば」、「あいなければ」、「暇なくて」とあり、叙述することのわずらさしさを理由として挙げているので『煩雑』に分類できる。8の「暇なくて」はそれ以外の三例とは異なり、作者自身の状態を表しているが、「書く暇もない」つまり「書く時間を割くのももったいないくらいわずらわしいことだから書きません」という、作者の消極的姿勢と見なせば『煩雑』に分類できるのではないかと思われる。あるいは「暇なくて」を「叙述すべき事柄があまり重要でなく、強いて書くには及ばないから書きません」というように解釈するならば『煩雑』よりも『些細』に分類すべきかもしれない。しかしこの場合、その叙述すべき事柄が落窪姫君の子どものたちの袴着についてなので、『些細』が適当なのか断定はできない。

また、11に注目してみたい。これは、それ以外の形態とは異なり、

「書かず」という打消しの語を使用せずに、しかしそれでいながら書くことを否定しているため、「書かず」型草子地の一つとして認められよう。しかもこれは先の、中野氏の分類による〈煩雑〉に含めて良いのではないかと思われる。「書かず」の前には「うば」と順接で言葉を結ぶ用例には当てはまらないものの、「むつかし」とある。ここは落窪姫君にとって、腹違いの妹にあたる四の君が新夫である帥に従って筑紫に下向することになり、落窪姫君が手厚い餞別をする際の品々を列記した描写であるが、作者はその煩雑さを厭って「むつかし」を使用したのではないだろうか。よって「むつかし」は、書かないことの理由と見なすことができ、煩雑さを避けたい作者の姿勢が読み取れよう。そしてそれと同様の考え方で、「書かじ。うるさし。」とある、3もやはり〈煩雑〉に分類できよう。

最後に、9であるが、これは「書かず」の前に、「聞かねば」とあるので〈未見聞〉に分類できよう。ここは、四の君と帥の会話について「聞かねば書かず」とある。四の君と帥が会話をすると、う場面設定自体が作者の創作に拠るものであることを踏まえると、「聞かねば」という言葉はやや附に落ちないが、突き詰めて考えるならばこれも〈煩雑〉や〈些細〉と同じで、強いて書くには及ばないということ、言葉を変えて「聞かねば」で表現しているに過ぎないとも考えられる。あるいは「帥と四の君の二人だけの会話は聞こえないから書かない」という、二人の親密性が「聞かねば」の一語に集約されているという推測も出来る。ただし、こちらはそのように判断する根拠に乏しいため、可能性としては低いように思われる。

理由付きの「書かず」型草子地について、今述べてきたことを分

類表で示すと次のように整理できよう。

用例	分類	根拠となる語句
2	同列	同じことのやうなれば
4・6・7・8・	煩雑（些細）	うるさければ（4）、猛なることどもなれば（6） あいなければ（7）、暇なくて（8）
3・11		うるさし（3）、むつかし（11）
9	未見聞	聞かねば

（三）「書かず」の持つ意味・効用

さて、『落窪物語』における「書かず」型草子地を考察する上で最も大切なことは「書かず」の持つ効用や意味であろう。無断で描写を省略するのではなく、わざわざ「書かず」と意思表示をした作者の狙いは何であろうか。それを探るにあたり、鍵となるのが1と10の描写ではないかと思われる。というのは、この二例においては「書かず」のあとに、「思ひやるべし」という語が記されているからである。この二例において作者は、ただ「書かず」と断るのではなく、「書かないけれど省略した事柄まで思いやって欲しい。」というように、読者に物語世界へ参加を促そうとしている。こうした理由からだろうか。水谷尚美氏は「書かず」型草子地のことを「呼びかけの草子地」と称している⁷¹。そして、この二例には「書かず」の前に、理由が書かれていないということにも留意したい。これは、これから読者に想像してもらいうためにも「あいなければ」「うるさければ」「暇なくて」など、否定的な内容の理由を書くことを避ける、

対読者意識の働いた作者の工夫といえようか。「思ひやるべし」と読者にお願しているのに、その直前に、「あいなければ書かず」と記述されていたら読者の側も「思ひやる」気が削がれてしまうかもしれない。

また、これを契機に助動詞「べし」と「む」を用いて、「しめてください」と適當の働きをする描写を「書かず」型草子地と結びつけて考えられるかどうかを試みたい。ここで、「書かず」の描写は伴わないが、「思ひやらむ」「思ひやるべし」といった表現の記述を挙げたいと思う。

13 あこきが心地も、ただ思ひやるべし。(巻一 一一八頁)

14 乗りたる人の心地、ただ思ひやらむ。(巻二 二三八頁)

15 わびしく、歩み帰る心地も、ただ思ひやるべし。(巻二 一九二頁)

16 事の作法、いとめでたし。ただ思ひやるべし。(巻四 一一〇頁)

先の1・10の描写「書かず。思ひやるべし」の描写と、この13・14・15・16の四例のように「書かず」を伴わずに「思ひやるべし」「思ひやらむ」だけの描写を比べた時、その違いにはどのような傾向が見られるのか。私はそこに、作者が読者に何を「思ひやるべし」と期待するのか、その対象が異なる、という傾向があるのではないかと考える。そこで、「思ひやるべし」に「書かず」を伴うかによって区別し、それぞれが何を「思ひやるべし」の対象としているのかを表に示した。

	用例	対象	「思ひやるべし」型 (単独)型			
			10	13	14	15
	1	若君の産養落窪姫君と四の君、別れの会話		監禁虐待を受ける落窪姫君に同情する、あこぎの気持ち	賀茂祭で乗っている車が壊されるという報復を受けた、継母方の気持ち	清水寺で局を奪取されるという報復を受けた、継母方の気持ち
16		太政大臣(道頼父)の六十賀の儀式				

その結果、「書かず」を伴う場合は、読者に推察して欲しいその対象が、儀式の有様や会話等であるのに対し、「書かず」を伴わない場合は、読者に推察して欲しいその対象が、「心地ただ思ひやるべし」とあるように、「心地」という人の心理についてである、ということが言えると思う。16の一例はそれに当てはまらないが、他の三例つまり13・14・15は全て「人の心地を思いやって欲しい」となっている。しかもこの三例は、そのどれもが虐待や報復の場面で被害にあった者やその周りの者の、悲しく辛い感情を、読者に思いやって欲しい対象にしている。このことから、両者の書き分けを作者は意図的に行っていたと考えることが出来るのではないだろうか。作者は、儀式の有様などは本来記すことが期待されているが、この部分では省略させたいがために、「書かず。思ひやるべし」という書き方をし、「ここに書かないけれど、当然分かりますよね。」という態度で読者を物語に誘った。それに対し、13・14・15の三例のようなく、とりわけ登場人物の強い感情が予想される場面では、あえて

読者にその想像を全て委ねているのである。「思ひやるべし」という言葉で読者に物語世界への参加を促そうとしている点では、前者も後者も同じだが、むしろ後者には「書かず」という記述をあえてしないことで、読者に対し、「促す」という態度を越えて、物語世界に「引きこませる」という、作者の思い入れが感じられる。

この推論に拠るならば、16は太政大臣の六十賀の儀式について「ただ思ひやるべし」とあるので、1・10と同じ部類に当てはまり、「書かず」という記述が欲しいところである。ただ、四例中三例に当てはまる推測なので、作者の筆の進め方として、そのような傾向が認められることは確かであろう。さて、この推測に従うならば、先に挙げた「書かず」型草子地全十二例は「書かず」の対象が行事や会話などであるべき、ということになる。そこでそれら十二例について「書かず」の対象が何であるのか調べると、やはり1〜12の用例は全て、その対象が行事の様子や会話などである。

以上の個別例からの検証によると、「書かず」の持つ意味・効用は次のように考えられるのではないか。それは、「書かず」の対象が常に会話や行事であり、「書かない」ことの理由が記される場合には、その理由が〈同列〉・〈煩雑（些細）〉・〈未見聞〉といったものであり、書くことの価値を低く見ていることから、作者は頻繁に繰り起こる行事等について、それらが特に報恩部・報復部において重要な役割を果たすと認知しつつも、名前を示す程度に留めることでストーリーの展開に停滞感を持たせないようにした、というものである。つまり、そこには読者を飽きさせずに物語を読み進めさせるための作者の工夫、あるいは狙いが読み取れるということである。

二章 草子地に見る『落窪物語』の位置

物語史の上では、通常、『源氏物語』以前に成立した物語を前期物語と呼称するが、この前期物語には『竹取物語』、『うつほ物語』、そして『落窪物語』などのいわゆる作り物語と、『伊勢物語』、『大和物語』、『平中物語』のような歌物語の二つの系統が存在する。そしてその両系統の性格が受け継がれて大成したのが『源氏物語』である。本論で扱う『落窪物語』を中心に据えるならば、その前後に『うつほ物語』と『源氏物語』が位置づけられる。この三作品の草子地研究の実態は、複雑で高度な表現方法をのしている『源氏物語』は盛んであるものの、『落窪物語』や『うつほ物語』については希薄である。まして、それらに関連づけている先行研究は皆無であるといえよう。そこで本章においては、『落窪物語』の草子地の性格を『うつほ物語』と『源氏物語』のものと比較し、それらを文学史的に関連づけることを目的とした。

なお、本章で使用する『うつほ物語』、『源氏物語』の本文はそれぞれ『新編日本古典文学全集 うつほ物語』、『新編日本古典文学全集 源氏物語（一）』（六）（小学館）の本文を引用したものであり、通し番号の上につけた「う」「源」はそれぞれ『うつほ物語』、『源氏物語』のことを示している。

（一）『うつほ物語』の「書かず」型草子地

『うつほ物語』に特化した草子地研究は辛うじて中野幸一氏の先行研究があるが、『落窪物語』以上に少ない。⁸⁾ここで、研究対象となる「書かず」という形式の地の文を『落窪物語』の時と同様に、

『うつほ物語』の本文から抽出した。

う1 中納言、式部卿の宮に御かはらせ参りたまふ。宮、闕巡三度まで行きたまふ。さて、

姫松はいつも生ふなる宿なれば陰涼しげに見ゆるたびかな

《……十人十首省略……》

権中納言、

みどり子の多かる中にふた葉よりよろづ世見ゆる宿の姫松これより下にあれど書かず。(蔵開上 三二六頁)

う2

かくて、いぬ宮に餅参りたまふとて、女御の君、折敷の洲浜を見たまへば、例の鶴二羽、しかよそひてあり。松生ひたり左大将の手にて書きたまへり。

百日川今日と知らせつ乙子をぞ数へて千代となせよ姫松

《……四人四首省略……》

とてさし出づれば、異人は見たまはず。おとど、宮たち、宰相の中將、良中將、藏人の少將、宮あこの大夫、みな詠みたまへれど書かず。(蔵開下 五八四頁)

3う

嵯峨の院、「老いは厭ふまじかりけり。いみじう聞かまほしと思ひしむかしの手を弾き、末の世に、かくありがたきことのとどまりぬること」と興じたまひて、いとになく上手に吹かせたまふ高麗笛を、これに合せて吹かせたまふに、「さたに稚児の弾きたまふやうならず。手のなりにけることと、いみじくあはれなるに、え堪へず」とのたまはせて、立ちて

舞はせたまひつつ、

姫小松ひきつることに忍びあへず白きかしらの新羅舞せむ

《……三人三首略……》

となむ。人々ありけるを書かぬは、本のままなり。(楼の上

下 六〇九頁)

『うつほ物語』は長編物語であるが、「書かず」という記述はわずか三例であること、そしてそのどれもが「蔵開」以下の和歌に対して「書かず」と記している。和歌を書かないとはいえ、始めから全ての和歌を記さないと断言するのではなく、既に幾つかの和歌を記した後に、「書かず」と断わりを入れることも三例に共通した傾向である。また、『うつほ物語』の「書かず」型草子地には、書かない理由を示しているものではなく、中野氏の言葉を借りるならば、これも「単純省略⁹⁾」と言えるものばかりであった。

(二) 『源氏物語』の「書かず」型草子地

次に、『源氏物語』の「書かず」型草子地について考える。『源氏物語』を扱う問題点として、『源氏物語』には作者と語り手の存在が明らかに別物として示されている部分が存在したり、「聞こえず」、「言ひつづけず」のような、作者の言葉なのか、語り手の言葉なのか、それとも別の見聞者の言葉なのか分かりにくい記述も存在する為、どこまでを「書かず」型草子地とするか見極めが難しい、という点が挙げられる。「聞こえず」や「言ひつづけず」も「書かず」と同じような意図で作者が使用している可能性も十分にあるが、ここはあくまで「書かず」型草子地について比較するため、「書かな

い」という、作者の意図が明確に記されている十例を以下に提示する。

源1 こまかなることどもあれど、うるさければ書かず。(夕顔 一九五頁)

源2 そのついでにいと多かれど、さのみ書きつづくべきことかは

(賢木 一〇〇頁)

源3 多かめりし言どもも、かうやうなるをりのまほならぬこと

数々に書きつくる、心地なきわざとか、貫之が諫め、たうる方にて、むつかしければとどめつ。(賢木 一四三頁)

源4 女御、「かく数まへたまひて、立ち寄せたまへること」と

よろこび聞こえたまふさま、書きつづけむもうるさし。(須磨 一七四頁)

源5 数知らぬことども聞こえ尽くしたれど、うるさしや。ひが事

どもに書きなしたれば、いとどをこにたくなしき人道の心ばへもあらはれぬべかめり。(明石 二四頁)

源6 こまかに聞こえ知らせたまふこと多かれど、かたはらいたければ書かぬなり。(藤袴 三三三頁)

源7 かかる所の儀式は、よろしきだに、いと事多くうるさきを、

片はしばかり、例のしどけなくまねばむもなかなかやとて、こまかに書かず。(梅枝 四一四頁)

源8 院の御前に、浅香の懸盤に御鉢など、昔にかはりてまゐるを、

人々涙おし拭ひたまふ。あはれなる筋のことどもあれど、うるさければ書かず。(若菜上 五〇頁)

源9 作りける文の、おもしろき所どころうち誦じ、やまと歌もこ

とにつけて多かれど、かやうの酔ひの紛れに、ましてはかばかりしことあらむやは。片はし書きとどめてだに見苦しくなむ。(総角 二九八頁)

源10 御台八つ、例の御皿などうるはしげにきよらにて、また小

き台二つに、華足の皿ともいまめかしくせせたまひて、餅まゐらせたまへり。めづらしからぬこと書きおくこそ憎けれ。

(宿木 四一四頁)

『源氏物語』に「書かず」型草子地と認められる記述は十例と、『源氏物語』全体の分量からすれば多いとは言えない。これは、先ほどから述べているように、「言ひつづけず」、「聞こえず」など、「書かず」型草子地を使用せずに、執筆の省略を暗示させる記述が多様に散りばめられていることに拠ると思われる。全十例のうち、和歌に対して「書かず」型を使用しているのは、源2・源3・源8・源9の四例であり、それらは盛儀の歌や個人的な和歌などを、書かないと省略している。「書かず」型草子地の対象が和歌であるものと、散文部分に対するものが、ほぼ半分ずつあり、そこに一貫性(『うつほ物語』は和歌に対してのみ「書かず」型草子地を使用する。)は見られない。また、これは表現の多様性と言えようか、『源氏物語』の「書かず」型草子地は十例認められたが、「書かず」や「書かぬ」というようなストレートで分かりやすい書き方をしているのは、わずかに四例だけで、それ以外は「書かず」を変形させ、凝った表現にした「書かず」型草子地である。「書かず」の表現が複雑化しているのと同様に、理由の記し方も、また複雑で凝った表現になっており、「くば(ので)」というように単純に順接で言葉を結ぶ

ものと、そうではないものが半々である。理由内容の分類として「書かず」型草子地には、〈煩雑〉・〈表現不能〉・〈些細〉が当てはまる。

(三) 『うつほ物語』『落窪物語』『源氏物語』に見る草子地の変遷

三作品における「書かず」型草子地の比較観点として、「書かず」の対象の違い、「書かず」という表現自体の違い、「書かず」の理由の有無とその内容の違い等がある。この中でも、草子地の変遷として特に注目すべきは「書かず」という表現自体の違いではないだろうか。これは主に『源氏物語』において、その著しい変化が見て取れる。まず『うつほ物語』であるが、『うつほ物語』の「書かず」型草子地は、何の変形もなく、三例とも「書かず」という表現がそのままストレートに使われていた。

次に『落窪物語』であるが、こちらも十二例中ただ一例を除き、その他は全て「書かず」という表現がストレートに使用されていた。これに該当しない残りの一例はどうかというと、「書くべけれど、むつかし。」となっている。これは「書かず」という打消しの語を使用せずに、しかしそれでいながら書くことを否定しているため、「書かず」型草子地である。それ以外の用例と表現を同じようにするなら、「むつかしければ、書かず」となるが、敢えて「書かず」を使用していないところが興味深い。そしてこれは巻四後半、つまり物語終盤において現われている。それを加味して作者の意図を推測するならば、作者は何度も現われる「書かず」という表現に読者が飽きることを懸念し、あわてて、異なる表現を使用したと考えることはできないだろうか。あるいは、この作品が短期間で書かれた

ものではなく、執筆にある程度の時間的余裕を有していたならば、作者の表現技巧が多少なりとも向上していたとも考えられる。

最後に『源氏物語』であるが、先ほども述べた通り、『源氏物語』ではさらに「書かず」型草子地が多様化している。むしろ『うつほ物語』や『落窪物語』ではそれが当然であった、「書かず」というストレートな表現のほうが『源氏物語』では少数であり、十例中四例しかない。それ以外の「書かず」型草子地はどうであるかといえば、「書くべきことかは」などのように反語を使用しているものもあれば、「ひが事どもに書きなしたれば、いとどをこにかたくなしき入道の心ばへもあらはれぬべかめり。」などのように、「書く」とがマイナスイメージをもたらすのではないかと、懸念を表しているものもある。前者は、ストレートな「書かず」に比べれば技巧的な表現であるが、そうはいっても比較的分かりやすい。しかし後者のような例は、作者の書きたくないという明確な意図が読み取れるものの、それを遠回しな表現で記しており、やや曖昧な「書かず」型草子地といえる。文章を書く技術という点で比べると、「うつほ物語」や『落窪物語』に比べ、『源氏物語』の作者の力量は圧倒的といえようか。あるいは読者の側からこの表現について捉えるのなら、時代が下るにつれ、出回る物語も増えていただろうことが予測されるため、読者は内容でも、また表現でも、より優れた物語を好んだであろう。だからこそ、『源氏物語』で試みられた草子地においても高いレベルの作品が生まれた、と考えることはできないだろうか。

おわりに

本論では、「書かず」という、『落窪物語』に多用される語に注目して考察をした。その結果、「書かず」と共に記される理由の有無、あるいは「書かず」と共に記される「思ひやるべし」という記述の有無から、作者は「書かず」の書き分けを意図的に行っており、そこには、作品の展開に停滞感を持たせないようにという狙いが隠されているのではないかと考える。また、第二章では、時代的に『落窪物語』の前後にある『うつほ物語』・『源氏物語』の「書かず」型草子地の傾向を探り、それらとの比較を試みたが、たしかに『うつほ物語』から『落窪物語』そして『源氏物語』と時代が下るにつれ、作者の表現の進歩が窺える。「書かず」型草子地を根拠に草子地全体の問題を捉えることは困難であるが、「書かず」型草子地の変遷とも言える本調査が、草子地の史的展開を知る一端になるのではないだろうか。

引用文献

- 注(1) 神田龍身「語りの偽再生装置―『源氏物語』の〈音読〉」(『偽装の言説平安朝のエクリチュール』森話社、平成二十一年)
- (2) 『日本国語大辞典 第二版』(小学館、平成二十三年八月)
- (3) 『平安朝文学事典』(東京堂出版、昭和四十七年五月)
- (4) 井上康之「草子地の原初形態の解明―一葉抄を手がかりにして―」(『国語国文 第三七巻』、京都大学国文学会、昭和四十三年八月)
- 中野幸一「源氏物語における草子地」(『源氏物語講座第一巻 主題と方法』有精堂出版、昭和四十九年五月)、「源氏物語の草子地と物語音読論」

- (『学術研究』、昭和三十九年二月)
- 藤井貞和「『草子地』論の諸問題―物語世界の語り手」(『国文学』、昭和五十二年一月)
- 三谷邦明「『源氏物語』における〈語り〉の構造―〈話者〉と〈語り手〉あるいは『草子地』論批判のための序章―」(『日本文学』、昭和五十三年一月)
- (5) 中野幸一「源氏物語における草子地」(『源氏物語講座 第一巻 主題と方法』有精堂出版、昭和四十九年五月)
- (6) 注(5)に同じ。
- (7) 水谷尚美「草子地をめぐる『落窪物語私論』」(『名古屋大学国語国文学 第四五号』名古屋大学国語国文学会、昭和五十四年十一月)
- (8) 中野幸一「『うつほ物語の研究』」(武蔵野書院、昭和五十六年三月)
- (9) 注(5)に同じ。